

樋口一葉と情報リテラシー

保 月 紀 子

〈情報〉は現代人にとってのみ特別の価値を持つ記号である、と言えるだろうか。否、100年前の日本においても、人々は〈情報〉を求めていた。太古から脈々と受け継ぎ受け渡して行く〈情報〉を流通させ、人々の直接のコミュニケーションによって交わされる〈情報〉に集い、独自で得ることのできる装置としての〈図書館〉の〈情報〉を求める人々が東京のまちに増えつつあった。

文部省書籍館は明治5年湯島の旧大学講堂内に発足し、明治13年東京図書館と改称、18年に上野の東京教育博物館と合併し、22年博物館を分離し独立した。「東京教育博物館ト合併及規則改定ノ件」(『東京図書館年報』 明治19年7月付)によると、閲覧は有料であった。

本館図書ハ従前無料ニテ求覧ヲ許シタレトモ然ル時ハ唯求覧人員ノ増加スルノミニシテ頗ル雑踏ヲ極メ真正読書ノ人ヲ妨ルノ弊ナキヲ得サルニ以テ爾後求覧料ヲ徴収スルコトニ定メ即チ一人一回分ヲ金一錢五厘トシ別ニ篤志者ノ為メ二十回分金十錢ノ求覧券ヲ発行シテ移転後開館ノ日ヨリ実施セリ

明治の伝説的作家・樋口一葉も、東京図書館を頻繁に利用していた。一葉の日記『若葉かげ』(明治24年4月11日～6月24日)の6月10日の部分に、「今日は図書館に書物みに行んの約成しかば」という文章があり、〈図書館〉という言葉が初出する。〈図書館〉の利用は、恋人と噂された半井桃水の勧めによるものと言われているが、〈情報〉を求める一葉にとっては〈図書館〉とその環境そのものが、恰好の文化装置であったことだろう。是非は別にして、一葉の通った〈図書館〉は「真正読書ノ人」のためにだけ開かれていた。前出の求覧券「一回分一錢五厘、二十回分金十錢」の費用は、生活費も不足しがちであった一葉にとっては、小額では無かったはずである。『よもぎふ日記』(明治25年12月20日～26年4月6日)の12月24日の部分に、

かけじとおもへど、実に「貧は諸道の妨」成けりな。すでに今年も師走の廿四日に成ぬ。こんとしのまうけ、身のほどへにはいそがるゝを、此月の始三枝君よりかりたるかねの、今ははや残り少なにて、奥田の利金を払はゞ誠に手払ひに成ぬべし。餅は何としてつくべき、家賃は何とせん、歳暮の進物は何とせん。「暁月夜」の原稿料もいまだ手に入らず、外に一錢入金の当もなきを、今日は稽古納めとて小石河に福引の催し、いと心ぐるし。

とあり、金銭的困窮が窺える。それでもなお、一葉は〈図書館〉に通い続けた。当時の女性の限られた職業の中でも特殊な「作家」を選択した一葉は、自身の目的を成し遂げるための努力としての〈図書館〉通いを怠らなかったのである。また、日記・無題(明治24年7月17日～8月10日)の8月8日の部分に

いつ来たりてみるにも、男子はいと多かれど、女子の閲覧する人大方一人もあらざるこそあやしけれ。それもそれ、多くの男子の中に交りて、書名をかき、号をしらべなどしてもて行に、「これは違ひぬ。今一度書直しこ」などいわれるれば、おもて暑く成て身もふるへつべし。まして、面みられ、さゝやかれなどせば、心も消る様に成て、しとゞ汗にをしひたされて、文

取しらぶる心もなく成ぬべし。今は代言試験も近付し頃成とかにて、法律書取しらぶる人いと多かりき。思ふまゝのふみ借得て、よむとよむ程に、長き日もはや夕暮に成ぬるべしと記述されている。〈図書館〉で〈情報〉を求める女性は、極めて少なかったようだ。一葉のように気丈な女性でさえ、多くの男性に注目される中で〈図書館〉の職員と接することに緊張している様子を、察することができる。

『蓬生日記 一』(明治24年9月15日～11月10日)の9月15日に、

『本朝文粹』及『雨夜のともし火』『五雑俎』とをかる。馬琴の著書中に「五雑俎」といふこといと多く有しかば、見まほしくてなり。

と、一葉が〈図書館〉で借りた本の書名が、初めて記されている部分がある。『本朝文粹』は藤原明衡が編録した詩文集(寛徳2年((1045))ごろまでに成立)、『雨夜のともし火』は湯浅常山の武談集、『五雑俎』は、明の謝肇淛が著した博物誌(全16巻)である。一葉は、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』の中に引用されている『五雑俎』を、読んでみたかったということのようだ。一葉が古典などから「題材」や「内容」を自身の作品に借用したり変換したりしていたのは、諸論の認めるところである。この日借りた本も、何らかの形で一葉文学に取り入れられているかもしれない。一葉は、いわゆる〈情報リテラシー〉の達人であった。

一葉の作品の中で最も「謎」が多いとされ、その不可解さが魅力ともなっている『にぎりえ』について、一葉の秀でた〈情報リテラシー〉を先行研究とともに探求してみたい。伊狩章氏の「『にぎりえ』の構想と『心の闇』」(『國語と國文學』 東京大学国語国文学会 昭和51年1月号)によると、「一葉は『にぎりえ』の構想にあたり、この佐の市の執念に強いヒントを得、また構成上には『心の闇』の怪談ふうの構成を応用した」とある。『心の闇』は尾崎紅葉が明治26年に生んだ力作で「盲目の按摩佐の市の執念が凝りかたまつて女に祟り、生霊となって夢に現われ、はては女を〈執り殺す〉というテーマ」を持っている。『にぎりえ』の源七も、『心の闇』の佐の市と同じく愛する女へと向かう心理の深刻さがあり、それは一葉が紅葉の作品から借用したものとしている。

次に、鈴木啓子氏の「救済の陰画^{ネガ}—供犠としての『にぎりえ』—」(『論集樋口一葉』所収 おうふう 平成8年11月)には、

「恨は長し人魂が何かしら筋を引く光り物…折ふし飛べるを見し者ありと伝えぬ」における「人魂」の描出は、おそらく戸川残花の「桂川(情死を吊ふ歌)」(『文学界』明26・6)を同時代のプレ・テキストとしている。

とあり、残花の「人魂」は「愛の成就の表徴」であるのに対し、一葉の「人魂」は「恨」の形象として語られている」と論じている。

また、出原隆俊氏の「お力の登場—『にぎりえ』における〈借用〉について—」(『文学』 岩波書店 昭和63年7月)には、オリジナリティの欠如について次のように述べられている。

直接的な〈借用〉だと確定できない部分や、〈借用〉とは言えないまでもすでに同様の表現・モチーフが先行作品に見出される部分も含めると、作品を織りなす種々の集積を一つひとつの単一の要素のレベルに解体すれば、「にぎりえ」において独自に達成されたものを取り出そうとしても、皆無に近い。それは、従来、「にぎりえ」読解の上で問題点とされてきた箇所

についても例外ではない。

さらに＜借用＞を超越する小説成立の手がかりをこう捉える。

それにもかかわらず一つの作品として「にぎりえ」が衝迫力を秘めている、そのことの意味を解明する手がかりは、ひとえに、そうした諸要素を統合し構成する求心力、あるいは、同時代小説からの転用ということだけでは説明しきれない＜剰余＞の存在をどう把握するかにかかっていると見えよう。

そして、明治という時代の、制度圧に生きる女への視線を見透かして、論は続けられる。

「にぎりえ」のほぼ全編をおおう＜借用＞の跡を追ってきた。その＜借用＞のほとんどが、直接的であれ間接的であれ、お力という一個の相貌を持った女性像を出現させるためになされている。字句から、風俗、微細な光景、人物配置、＜語り手＞の位相、はては＜恨＞というテーマまで、種々のレベルの＜借用＞が見られた。それは、下層という状況にある「我身」を凝視する女の内部の真実に照明を当てた。時には、狂気にまで迫る内部の逼迫の場面に集中している。「にぎりえ」を統合する求心力はここにあったと言えよう。また、表立った形ではないが、必然的に＜近代化＞というものの問いかけにまで達する叙述も見られた。＜借用＞で収まらない＜剰余＞とでも言えるだろう。

出原氏の考察は「集積の場」としての『にぎりえ』を次のように評価して結んでいる。

「にぎりえ」を、突如明治二十年代後半に出現した問題作として片付けるのではなく、同時代の先行作品が分け持っていた課題の、より広く深い集積の場としても捉えること。そこにも＜借用＞の問題の解明の意味があると指摘して稿を閉じたい。

以上、伊狩章論・鈴木啓子論・出原隆俊論による一葉の『にぎりえ』への先行作品の活用目的や活用方法について、引用させていただいた。「借用」を「活用」へと変換させ得たのは、歌塾萩の舎で共に学んだ田辺花圃らの学歴組に対し、学歴とは無縁であった一葉が筆によって立とうと志し自身の「才」により世に出るということを夢想しただけに停らず、＜図書館＞通いをし、文学界同人の友人たちから本を借り、知識の蓄積を目指しながら、近代文学成立期の諸問題を見据える視線を獲得したことによるところが大きいと思われる。

＜情報＞をいかに活用し得るか、その活用能力は＜情報＞を自分のものとして受信し、変換し、発信していくための、知識や感性を磨くまなざしを持ち続けるということに懸っていると言えるのではないだろうか。まさしく、一葉は＜情報リテラシー＞により近代を文学に取り込み、現代に継承している稀有な作家であろう。

(ほづき のりこ 大分市民図書館)

参考文献

樋口一葉著 前田愛編 『全集樋口一葉 第2巻』 小学館 1979

樋口一葉著 前田愛編 『全集樋口一葉 第3巻』 小学館 1979

角家文雄編著 『日本近代図書館史』 学陽書房 1977